

(PDF版・3の18) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」 (115-231頁)

「一 神の用意」

第二の形態の神の言葉である「聖書的証人たちは、宇宙の中での人間を指し示すことによって、いわば宇宙の中での人間を通し貫いて、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神の啓示の人間を……指し示す」、換言すれば第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての「神が、その民と結ばれた契約の中で、すなわちキリストのからだの肢がその頭と一つである単一性〔Iコリント3・10-11、エフェソ14以下〕の中で、神的な適意に〔神のみ心に適っていることに〕、そのようにして神認識〔すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、換言すれば神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性」〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性」(「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」)を前提条件とするところの、客観的な「存在的なくラチオ性」〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なくラチオ性」に基づいて、終末論の限界の下で信仰の認識としての神認識、啓示認識(啓示信仰)、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事〕にあずかっている人間を指し示す」。そのようにして啓示認識(啓示信仰)にあずかっている人間は、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な(それ故に、完全に自由な)聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〈全体〉)における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神(「神の顕現」)にしてまことの人間(「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」)——この「イエス・キリストが、われわれ人間に対して、〔その起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕聖書および〔その聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉であ

る] 教会の宣教を通して同時的となる時と所、『神われらと共に』が神ご自身によってわれわれに語られるところにおいては、「神の支配のもとに入ることを承認し確認する」、「世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する」、「自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔・「裁き」〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」（『教会教義学 神の言葉』）。このように、第二の形態の神の言葉である「聖書的証人たちは、決して、〔それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、〕宇宙の中での人間をそのまま真剣に受け取り、〔生来的な〕彼の『自然的な性質』の中で、すなわち彼の〔自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して得られた〕自己理解の中で語りかけようとはしない〔すなわち彼の<自己>理解の中で<自己>表現しようとはしない〕」。第二の形態の神の言葉である「**聖書的証人たちは、神の啓示を通して彼についての起源的な本来的な真理が彼に向かって現わされて以来、……そのような人間を通し貫いて、神のみ心に適った人間、**〔「人間の歴史的形態」としての〕**ナザレの人間イエス……に対して下された<裁き>**〔律法、死〕、**人間がイエスの中で神の前に見出した<恵み>**〔福音、生〕**を指し示す**」（第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「**神の啓示は、裁き〔律法、死〕であることによって、恵み〔福音、生〕である**」）——「福音書の中ではすべてのことが受難の歴史に向かって進んでおり、しかもまた同様にすべてのことは受難の歴史を超えて甦り・復活の歴史に向かって進んでいる。すなわち、旧約〔「神の裁きの啓示」・律法、死〕から新約〔「神の恵みの啓示」・福音、生〕へのキリストの十字架でもって終わる古い世〔・時間〕は、復活〔新しい世・時間〕へと向かっている」、この「まことの過去」と「まことの未来」（復活されたキリストの再臨、終末、「完成」）を包括した「まことの現在」としての「われわれの時間の中で実在の成就された時間」、「キリスト復活の四〇日（使徒行伝）」、「キリスト復活四〇日の福音」は、「新しい世〔・時間〕のはじまりである」（『教会教義学 神の言葉』）。「予定説は、イエス・キリストにある救いの自由な表現そのものである」、「それは、真に罪なき、従順なお方イエス・キリスト自らが、われわれ人間に代わって、見捨てられた人間となり、その罰〔死〕を引き受け給うたということである。これが神の最高の義である」。このイエス・キリストにおける出来事の内容は、「生来人間は、神の恵みに敵対し、神の恵みによって生きようとしなが故に、このことこそ、第一に恵みが解放しなくてはならない人間の危急であった」という点にあるのであるが、そのことを、その出来事は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」（『教会教義学 神の言葉』）の<総体的構造>（『知解を求め

る信仰、アンセルムスの神の存在の証明』)に基づいて、われわれ人間に自己認識させる。その時、われわれは、「神の選びをイエス・キリストの復活において認識〔・信仰〕し、神の放棄をイエス・キリストの十字架において認識〔・信仰〕することができる」。イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、「われわれが本当に神の啓示を認識する時、われわれは初めて、神に対する人間的反抗、神の敵、神に相對して、自分の力を誇り、まさにそのことの中でこそ罪深い墮落した人間として自分自身を、またそのような人間の世を認識〔・信仰〕することができる（『カール・バルト著作集3』「神の恵みの選び」）。第二の形態の神の言葉である「聖書的証人たちは、宇宙の中での人間の起源および未来としてのイエスを指し示す」。「そのようにして聖書的証人たちがなす指し示しは、ここでもまた、最も狭義の、最も厳格な意味での預言者的、使徒的指し示しである」。身体（肉体）と身体を座とする精神（意識）を介した、普遍的で実践的な全自然との相互規定的な対象的活動を行うところの自然の一部としての自己身体、性としての他者身体、宇宙を含めた天然自然としての外界、この全自然の「創造が無からの創造であるように、和解は死人の甦りである。われわれは創造主なる神に生命を負っているように、和解主なる神に永遠の生命を負っている」。この神の全き自由において「創造は、契約の外的根拠として、イエス・キリストが始原であり中心であり終極である恵みの契約の歴史のための〈場所設定〉である」、また「恵みの契約の歴史は、創造の内的根拠として、創造の目標であるその契約の歴史の始原であり、中心であり、終極である〈イエス・キリストご自身〉である」（『教会教義学神の言葉』）。第二の形態の神の言葉である「聖書的証人たちが指し示している彼の真理は、どこかで彼から取り出された真理ではなく〔すなわち、彼の自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された彼の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」としての一般的な真理ではなく〕、それは、……今や〔客観的な「存在的なくラチオ性」〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なくラチオ性」の前提条件であるところの、客観的な「存在的なく必然性」〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性」〕に基づいて、換言すれば神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「その死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」〈と〉その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」・「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて、〕新たに彼のところに・彼の上に来た〔神の特別啓示の〕真理である」。

「分析的な真理ではなく、総合的な真理が、彼について語られる」。「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されその人間性と共に神性を賦与され装備されたその「最初の直接的な第一

の啓示ないし和解の概念の实在」としての第二の形態の神の言葉（その「最初の直接的な啓示の〈しるし〉」）である預言者および使徒たち——この聖書的証人としての「彼は、〔その「最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の实在」、「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、「啓示の〈しるし〉」として、〕確かに自分ではないし、自分であることができないが、ただ神のまた人間の真理を宣べ伝える者としての神の啓示の遂行の中であることができ、また事実なったところの一人の者であるとして特徴づけられ、そのような者となるよう任命されるのである」。「まさにそれだからこそ、聖書の〔「主要な言明」、「主要な線」、「『〈非〉自然』神学」的な言明〕中で、**事実、またあの別な線**〔「副次的な線」、「副次的な言明」、「傍系的な線」、「『自然』神学」的な言明〕**の上ででも語られている時、そのことは、決して聖書的な使信**〔「主要な線」、「主要な言明」、「『〈非〉自然』神学」的な言明〕**からの逸脱を意味しない**。「まさにそれだからこそ」、「あの別な線」は、「半分だけの響きを立てて、半分だけ拘束的に起こってはならず」、「主要な線」に全面的に「拘束」されたそれではなければならないのである。

「聖書の中で宇宙の中での人間が指し示されている時、**純粹な**、〔第二の形態の神の言葉である〕**預言者的・使徒的な指し示しが問題であり、神の啓示からして未来的な人間の真理が問題である**ということ〔神の啓示からして未来的な人間に関わる真理が問題であるということ〕」——このことを、「人は、まさに二つの純粹な『自然詩篇』である八篇と一〇四篇に照らして明らかにすることができる」。「人は、**五節の決定的な文章**、『人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか』という質問形式によって」、「『あなたの栄光は……みどりごとのみごとの口によって、ほめたたえられています』と言われており」、「**ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉れとをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました**」と言われていた時、生来的な自然的な「宇宙の中での人間自身が、そのまま神の証人として呼びかけられているかのように」、「軽率に、被造物仲間を支配する力を持って」いるかのように、「神の名の栄光について……語る事ができる」かのように「注釈をしないよう警告されている……」。したがって、もしもわれわれがこの警告を聞かないならば、「詩篇の作者に、不誠実な思い上がりを語らせることになる」、詩篇の作者を人々に誤解させ誤謬させ曲解させることになる、詩篇の作者に迷惑をかけることになる。

「人は何者なのであろうか。どの人間についてそこで語られているのであろうか」。このことについては、「ヘブル二・五以下で与えられている手がかりに注意を向ける時、すべてのことはまことに明瞭となる」。「そこでは詩篇八篇が引用されており、それから八節以下で、次のように言われている」——「『万物を彼に服従させ

て下さった』という以上、服従しないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない。ただ、『しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた』イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る——「このこと、すなわち<イエス>こそが〔「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの<名>」こそが〕、**事実、詩篇八篇で述べられている宇宙の中での人間であるとするならば**、「イエス・キリストにおける神の愛は、神自身の人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一である」（『ローマ書』）——このまことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」）イエス・キリストであるとするならば、「ほかの人間的なみどりごとのみごとの口によっても、神は、マタイ二一・一六以下によれば、彼らが〔先行して〕苦しみと栄光への道を進まれる**イエスの後に続いて**〔後続して〕、愚かしい叫びをあげながらついて行った時、讚美を用意されたのである」、その先行する「神の用意」に後続する仕方で、生来的な「自然的な人間にとって神の啓示から将来的な人間の口の中で、『主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょうか』という叫びがあげられるのである」。「『自然詩篇』一〇四篇についても事情はこれと全く同様である」。「詩篇一〇四篇は、一般的にも個々の点にわたっても、奇しき仕方、宇宙の中での人間が……めぐりかこまれ担われている……明瞭な秩序と調和と取り組んでいる」。「しかし、人は、この明瞭さを直接的な明瞭さとして理解することはできない」、「われわれが知っている〔生来的な〕人間は、すなわち自然的な人間は、〔その自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使した〕自己理解の中で、本当に、全体からして〔すなわち、啓示の真理に「自分がめぐりかこまれ条件づけられている」ということを認識できない、換言すれば自分自身は啓示の真理に立脚するのではなく一般的真理に立脚しようとする〕ことからして〕、……『主よ、<あなた>のみわざはいかに多いことであろう。あなたはこれらをみなく知恵>をもって造られた。地はあなたの造られたもので満ちている』（二四節）を読み出すことはできない」、

「『わたしは生きるかぎり、主にむかって歌い、ながらえる間は神をほめ歌おう。どうか、わたしの思いが主に喜ばれるように。わたしは主によって喜ぶ』（三三節以下）と語ることはできない」。啓示の真理に立脚させられた者は、「林の獣、若きしし、出かけて行ってわざにつく人間、海の大小の生き物、そこで戯れるために神が造られたレビヤタンはみな、『あなたが時にしたがって食物をお与えになるのを期待している。あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる』と言われている時、そのことは明瞭な慰めに満ちた響きを立てている」が、「われわれの世界像の枠の中でのこの出来事は、すべてのものがすべてのものに対して戦っている凄惨な生存競争を意味しているということを見過ごすことはできない」、「その箇所の直接的な続きが、『あなたがみ顔を隠されると、

彼らはあわてふためく。あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んで塵に帰る』（二九節）と言われていることを見過ごすことはできない。「詩篇の作者は、宇宙の中での人間を〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、先行する「神の用意」に後続する〕神の証人としている時、決してそれとしての人間の〔自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して対象化され客体化された人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」としての〕世界像そのものを語らせているのではなく、その世界像を通し貫いて、したがってその世界像は透明となる〔徹頭徹尾、相対化され、神の判定と裁きの下にさらされる〕という仕方、……今、ここで、われわれに全く隠されている創造の神性、知恵、いつくしみが再びわれわれのところに来る未来の世界の絵について語らせるということは明らかである。「詩篇一〇四篇は、黙示録二一・一一五の注釈なしに、たとえ一瞬たりとも、正しく理解することはできない」——「わたしはまた、〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある〕新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。その時、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。すると、玉座に座っておられる方が、『見よ、わたしは万物を新しくする』』と言い、また、『書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である』』と言われた」（ここにおいては、全く以て＜進歩史観＞はあり得ない。したがって、それが＜良きもの＞であれ＜悪しきもの＞であれ、経済社会構成の拡大・高度化、科学と技術の進歩・発達、その知識の細分化・増大、生活の利便性の向上は自然史の一部である人類史の＜自然史的＞過程における＜自然史的＞必然としての＜自然史的＞成果であるというマルクス『資本論』「第1版の序文」の言葉は客観的な正当性と妥当性をもっていることは明白であるが、しかしすでに＜直線的な＞進歩史観は全く成立しないことが明白であるにも拘らず、人間中心主義において＜直線的な＞進歩史観に基づいて自由を原理とする西欧近代を人類史における頂点としたヘーゲルの歴史哲学に依拠して、すなわちヘーゲルの歴史哲学を主としてそれに即して神学的な＜直線的な＞三段階的進歩史観を展開したモルトマンのそれは、時代錯誤も甚だしい彼の自由な自己意識・理性・思惟によって恣意的独断的に対象化され客体化された彼自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」に基づいた神学的な＜直線的な＞進歩史観であり、そのような自己主張であり自己表現でしかないものなのである。したがってまた、Web上のある牧師のようにモルトマンを評価し、モルトマンに評価されることを喜ばしいことだとした時、また神学者・喜田川信のようにモルトマンの神学的な＜直線的な＞三段階的進歩史観とメルロ・ポン

ティの身体性の概念（身心相関論）に依拠した神学的な歴史形成論を主張した時、彼らは、ただすでに自然時空に死語化してしまった神学の世界の中で思惟し語っているだけなのである。したがってまた、〈まだなお〉モルトマンをあるいはモルトマンに類したものを評価している神学者や牧師等がいるとするならば、それは滑稽なことなのである。「人は、詩篇一〇四篇のまことの文字通りの歴史的な説明に、ただの一瞬たりとも……自然的人間の世界像の中に、〔先行する「神の用意」に後続する〕預言者的、使徒的全権をもって読み〈入れ〉られ、それからまさにそのことが自然的人間の世界像から読み〈出され〉ているが故に、この詩篇の内容をなしている神の創造の秩序と調和の中で起こる神の讃美が可能となり現実のこととなるということ〔聖書的な「主要な言明」、「主要な線」、「『〈非〉自然』神学」的な言明〕を度外視して到達することはできない」。

「われわれは、さらに、聖書的な傍系的線のもう一つの重要な文書〔すなわち、聖書的な「主要な線」、「主要な言明」、「『〈非〉自然』神学」的な言明に包括された聖書的な「傍系的な線」、「副次的な線」、「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明のもう一つの重要な文書、それ故に木を見て森を見ないただ傍系的な線だけを形而上学的に抽象し固定化し全体化しては、ただ傍系的な線だけを拡大鏡にかけて全体化しては全く誤謬であるところの、もう一つの重要な文書、〕（中略）……ヨブ記の終りに記されている『つむじ風〔自然〕の中から』語られる神の答え（三八章以下）に注意を向けることにする。「その神の答えを理解するためには、……その神の答えは（著者の意味においては）ヨブの問題の〈解決〉」——すなわち、「それであるから世界の動きを神が支配し給う際の神の正しさを問うヨブの問いに対する十分な満足のゆく〈答え〉であるということから出発しなければならない」。「ヨブは、その神の答えの後で」、「主要な線」、「主要な言明」、「『〈非〉自然』神学」的な言明、「わたしはみずから悟らない事を言い、みずから知らない、測りがたい事を述べました」、「『聞け、わたしは語ろう、わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ』。わたしはあなたの事を耳で〔わたしはあなたのことを自分の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使した「理論的な仕方で」〕聞いていましたが、今はわたしの目であなたを〔あなたのその存在の仕方、性質、働き、業、行為に基づいて〕拝見いたします。それでわたしはみずからを恨み、ちり灰の中で悔います（四二・三―六）」——このようにして、「人は、〔「徹底的な仕方で」、「決定的なこと」、すなわち〕神の義を知る。言い換えれば、神は正しい方で〈あり給う〉が故に、神の前に身を屈しつつ、神の義を知る。このことこそ、著者が明らかに言おうとしていることである〔このことこそ、著者が明らかに言おうとしている、聖書的な「主要な言明」、「主要な線」、「『〈非〉自然』神学」的な言明である〕」。「しかし、ヨブは、どのようにしてそこのところに導かれるのであろうか」。「ヨブ三八章以下の内容は、……二つの

話の進行、三八―三九章と四〇―四一章の中で（この内第二のものを、人は残念ながら普通、本来のヨブ記に後から付け加えられたものとして排除するのであるが）、全く単純に神ご自身がその創造のそのもとの性質からして、人間にとって徹頭徹尾謎めいたもの〔秘義〕でなければならないみ業について言及し給う。「これら二つの話の進行のいずれにおいても、すべては問いの形で語られている（三八・五、八、一七、三一、四一、三九・一、一九、二六）」。「そのようにしてまた、ただ河馬とわに、河馬とレビヤタンが神の巨大な証人として、神ご自身によって登場させられている第二の話の進行においても、問われ、繰り返し問われている」。「人は、神の創造のみ手になるこれらの怪物に少しでも匹敵できるのか。自分の理解、知恵、力をもって少しでも太刀打ちできるのか。たとえただ遠くからだけでも、自分自身主であると想像することができるのか」――これらの問いも「レビヤタンについての描写が続くうちに結局また……沈黙する」。「問いは、描写が続くうちに、明らかに余計なものとして姿を消し、最後にレビヤタンについての神の語りでもって結ばれる」――

「地の上にはこれに並ぶものはなく、これは恐れのない者に造られた、これはすべての高き者をさげすみ、すべての誇り高ぶる者の王である（四一・三三以下）」。「それらすべては、ヨブを、どの程度まで、神は正しい方であるという認識にまで導くことができたのか」。「それは、明らかに、神の業を<直接的に>理解したからではない」。何故ならば、「まさにそれらのテキストこそが、神の業は、人間にとって〔「直接的に」〕理解できるものではなく、人間の理解を絶したもの・把握できないもの〔秘義〕であり、……その存在と具体的姿においてまさに無気味な・得体の知れないもの〔秘義〕であることを強調しているからである」。したがって、ヨブは、「まさに、世界の動きの主としての神を問う問いから、それらの問いが望みのないものであることから……由来して来ているのである」。このような訳で、「ヨブを教え、悔い改めさせるものは、明らかに積極的にも消極的にも、それら創造のみ業の存在と具体的姿そのものではない」、ヨブに悔改めの契機を与えようとした「世界の偉大さや奇しき姿についてすでにあらゆる種類のことを知っていた弁証学的な友人たち」の思惟と語りとは違って、「世界が偉大であり奇しきものであるということが、ヨブを悔改めへと導いた新しいことではない」。「そうではなくて、そこで新しいことは、徹頭徹尾……神ご自身がそのみ業についてヨブと語り給うところの、神ご自身がそのみ業を、ヨブに語りかけるご自身の言葉の内容とし給うということである」、

「新しいことは、世界そのものの存在と具体的な姿でもってとは与えられないのである」。「その方の言葉を通して、言うまでもなくそれらのその業は<なった>その神ご自身が、そのみ業を、ヨブに語りかけるご自身の言葉の内容とし給うのである」。この神は、「まさにその言葉の中で万物の主であり給い、そのようなものとしてまた河馬やレビヤタンの主であり給い、そのようなものとしてまた河馬やレビヤタンの<秘密>の、その<すべての>み業の秘密の、知恵であり給う神である」、「この神の

言葉を、ヨブは、神の業の秘密を指し示す指示の中で聞いたのである」。「ヨブを悔改めへと導いた三八章以下に出て来る秘義は、啓示の秘義、換言すればイスラエルの選びと導きの秘義〔神の起源的な第一の存在の仕方における秘義〕、イエス・キリストの十字架と甦りの秘義〔神の第二の存在の仕方における秘義〕と内容的に同一であると言っても言い過ぎではない」。「ヨブを悔改めへと導いた三八章以下に出て来る秘義〔「啓示の秘義」〕」は、秘義であるが故に、われわれ人間は＜直接的に＞理解することはできないし、「世界そのものの存在と具体的な姿でもっては」理解することはできないのである。

そのような訳で、バルトは、次のように述べている——徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、それ故に「成就と執行、永遠的実在としてある」、先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができていくところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（神の側からする神の人間との架橋）であり、「神との間の平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性であるところの、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な（それ故に、完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している（それ故に、ここにおいては、われわれは神の不把握性の下にある）「父なる名の＜内＞三位一体的特殊性」・「神の＜内＞三位一体的父の名」・「三位相互＜内在性＞」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事＜全体＞）における第二の存在の仕方（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（第二の存在の仕方における言葉の「受肉」、「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの＜名＞」）——このイエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、〔それが、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれ〕人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」（『教会教義学 神論』）。また、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」——すなわち、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」＜と＞その「啓示の出来事な中で主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・

キリストから降下し注がれる霊である」・「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による主観的な「信仰の出来事」の出来事に基づいてのみ、終末論的限界の下で信仰の認識としての神認識、啓示認識（啓示信仰）、人間的主体に実現された神の恵みの出来事は贈り与えられる。また、第三の形態の神の言葉に属する教会の宣教およびその一つの「補助的機能」（「教会的な補助的奉仕」）としての神学における思惟と語り、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないか」ということは、神ご自身の決定事項であつて、われわれ人間の決定事項ではない」、それ故にそれは「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈りの態度」〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」。また、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の第二の存在の仕方における神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な實在」）の関係と構造（秩序性）におけるその「最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の實在」としての第二の形態の神の言葉（その「最初の直接的な第一の啓示のくしるし>」）である聖書、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の<客観的な>信仰告白および教義（Credo）としての第三の形態の神の言葉である教会の宣教が現存している（『教会教義学 神の言葉』）。これらは、包括的に言えば、客観的な「存在的なく必然性>」<と>その中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件とするところの、客観的な「存在的なくラチオ性>」<と>その中での主観的側面としての主観的な「認識的なくラチオ性>」という<総体的構造>においてある（『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』）。